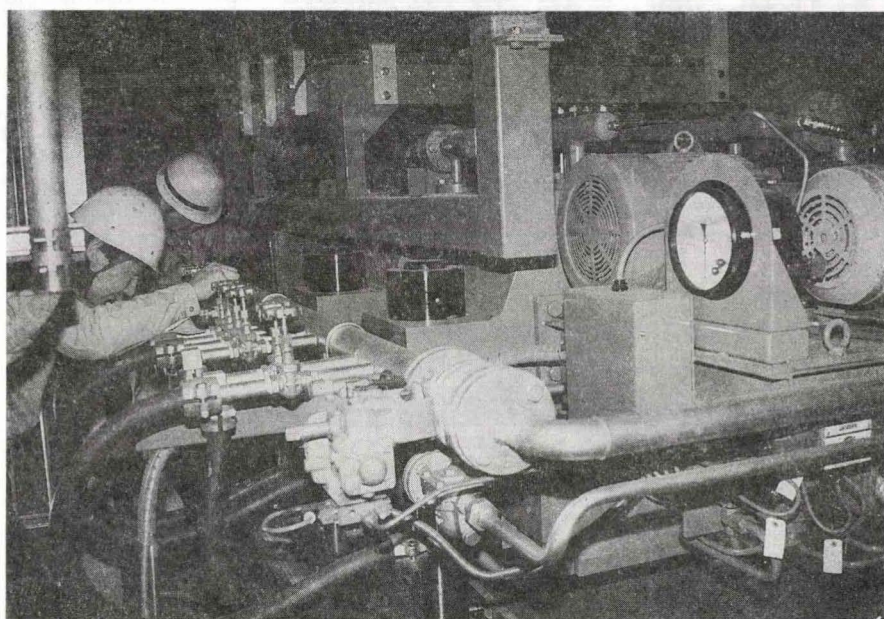


京大広報

No. 374

京都大学広報委員会



連続式スチーム噴射プレス装置 — 関連記事本文 755 ページ —

目 次

創立記念式典の挙行.....	750	<紹介>	
学術出版会設立委員会報告.....	750	木材研究所・木質材料研究部門.....	755
学寮問題.....	753	訃 報.....	756
平澤 興元総長の逝去.....	753	学生将棋名人戦で優勝.....	756
<部局の動き>		体育館附設プールの夏季利用.....	756
創立40周年を迎えた教育学部.....	753	白馬山の家 <small>の</small> 夏季開設.....	757
化学研究所 電子線分光型		白浜海の家 <small>の</small> 利用.....	757
超高分解能電子顕微鏡が完成.....	754	<随想>	
故 江口 彌教授の		美しい環境	名誉教授 中島暢太郎..... 758
工学部化学工学教室追悼式.....	754		

〈大学の動き〉

創立記念式典の挙行

6月17日(土) 本学創立92周年記念式典が、名誉教授、部局長ら関係者多数の出席を得て、本学総合体育館において挙行された。

式典は、午前10時に始まり、総長式辞、永年勤続者の表彰、永年勤続者代表の答辞があり、午前



11時終了した。

本年の勤続30年被表彰者は76名、勤続20年被表彰者は124名、計200名である。(被表彰者氏名は6月23日付学報第4311号に掲載)

総長は式辞の中で、永年勤続者の労をねぎらうとともに、本学創立にも密接に関係した第三高等中学校(後の第三高等学校)が大坂より本学の本部キャンパスの地に移転した明治22年(1889)から数えて本年が100年の記念すべき年であることを考慮し、特にこの第三高等中学校の移転と本学創立について取り上げ、その歴史的過程と意義について多くの史実を示し、克明に述べた。式辞の終わりで、平澤興元総長が式典当日の早朝急逝されたことを報告し、哀悼の意を表した。

引き続き11時30分から京大会館会議室で名誉教授懇談会が、11時40分から同会館1階講演室及びラウンジで永年勤続被表彰者祝賀会がそれぞれ開催された。

学術出版会設立委員会報告

京都大学における学術研究の成果等の公表を助成する学術出版会の設立については、従来からその設置の必要性が指摘されているところであります。

このたび、昭和58年6月の学術出版会設立準備委員会の答申の基本的趣意にそって、学術出版会設立委員会から、学術出版会設立の具体的構想について報告がありましたので、ここに報告書の全文を掲載して広く学内にお知らせします。

今回の報告のとりまとめに至るまでに払われた、学術出版会設立委員会委員各位のご尽力に対し、敬意と感謝の意を表します。

今後、本報告の趣意にそって、学術出版会の理事会を組織し、具体的な出版計画について検討を行うこととしています。

平成元年6月21日

総長 西島安則

平成元年 5月31日

京都大学総長

西島安則殿

京都大学学術出版会設立委員会

委員長 藤澤令夫

本委員会は、京都大学学術出版会の設立にかかわる諸事項について審議してきましたが、このたび成案を得ましたので、下記のごとく報告いたします。

記

I. 経緯

先に京都大学学術出版会設立準備委員会（林良平のちに福島徳壽郎委員長、以下「準備委員会」という。）は、1983（昭58）年6月に答申を行ない、京都大学学術出版会（以下「出版会」という。）の目的、理念、必要性とその具体的構想を提示し、「一日も早く出版会の発足することを熱願している」ことを表明した。この答申の全文は、「京大広報」№257（1983. 7. 1）に、沢田総長（当時）の前文とともに掲載された。

その後しかし、出版会の設立は延期されたまま今日に至ったが、本委員会は、この準備委員会の答申の趣旨を承継しながら、財団法人京都大学後援会（以下「後援会」という。）からの助成のもとに出版会の設立を現実化すべく、「京都大学学術出版会設立委員会要項」（1989（平成元年）年2月7日総長裁定）に基づいて設置された。

したがって本委員会は、準備委員会の答申において結論づけられた「大学出版部は、大学の果すべき使命、すなわち知識の維持、促進、普及という本質的機能の実現について、必須の機構である。さらに、このような媒体を通じてこそ、真の国際的学術交流の成果が実りあるものとなるものである。京都大学にとっても、その使命達成のためには、この種の出版部を欠くことはできない」という出版会設立の目的・理念を継承するとともに、その具体的構想 — 公益事業としての設立・運営・事業内容、財政と経営 — についても、その基本的趣意を承継するものである。

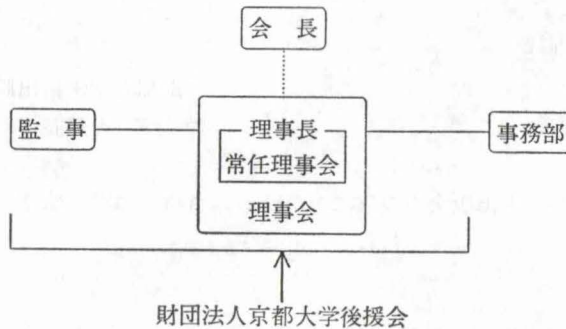
II. 出版会の性格 — 後援会との関係

- (1) 出版会は後援会から援助（助成）を受ける任意団体とする。京都大学創立100周年を機に財団法人として独立することをめざす。
- (2) 出版会の会計
 - (a) 出版会は、年間事業計画及び年間予算案を作成する。
 - (b) 出版会は、年間事業計画及び年間予算案に基づいて助成金の交付を後援会に申請する。
 - (c) 出版会は、後援会より助成金の交付を受ける。
 - (d) 出版会は、助成金等を経理する。（出版会貸借対照表及び出版会損益計算書）

III. 出版会の内部組織

- (1) 将来財団法人化をめざす大学の準公的組織とするが、当面は、簡明で機動的であることを期するために、評議会は設置せず、理事会のみとする。

(2) 組織図



(3) 組織図の説明

会 長 — 京都大学総長

理 事 会 — 各学部・教養部・研究所・センター代表（以上14名），附属図書館長，及び名誉教授若干名よりなる理事によって構成される。最高決定機関として，年間事業計画及び年間予算案の立案と決算を行なうため，年2回（会計年度の半ばと終了時）定例的に開くが，当面出版会が軌道に乗るまでは，必要に応じて随時開催して運営のための審議を行なう。

常任理事会 — 理事の互選による理事長（1名）及び常任理事（4～5名）から構成される業務執行機関。理事長は出版会を代表する。原則として月1回定例的に開くが，これも当面は必要に応じて随時開催し，また場合によりその下に部会等を設置して，運営のための諸方策を立案・執行する。

監 事 — 監査をつとめる。京都大学教職員及び後援会の役員から選出する。

事 務 部 — 出版会の事務を行なう。（当面嘱託1名，補助員1名くらい）当分の間，出版会の事務所は京都大学構内におく。

IV. 出版会の事業

(1) 事業内容については，準備委員会答申をふまえる。

(2) 事業項目中，当面力を入れるべきジャンルは，学術専門書の刊行とする。

(3) 学術専門書の刊行決定の手続き

(a) 企画は常任理事会で決定し，理事会で承認を得る。

(b) 企画は，なるべく早く，年度計画として作成されるように努力する。

(c) 出版会の事業内容及び企画決定の基準は広く学内外に認知されるようにする。

(4) 事業内容の充実のために，刊行物に関して，早急に次の可能性をさぐる。

(a) 出版会にふさわしいシリーズ（翻刻シリーズも含む），叢書の系統的な刊行の可能性（京都大学所蔵本の翻刻・復刻版，学術資料，その他）

(b) 外部との提携出版及び委託出版引受の可能性

む す び

本委員会は，以上の事項に基づいて出版会を早期に設立することが適当であると考えている。

学寮問題

平成元年4月18日開催の評議会において吉田寮に係る学寮問題が付議された。

総長から、昭和57年12月14日の評議会で決定され、昭和61年3月31日以降「執行中」であった吉田寮の在寮期限について現在に至るまでの経緯が

説明された後、『今回学生部長と吉田寮自治会との間で交わされた吉田西寮の撤去、東寮の補修、在寮者名簿の提出及び寄宿料の納付等の合意をもって、在寮期限設定以後の一連の執行は完了したとしたい。』旨の提案がなされた承された。

なお、これまでに至る経過の詳細については、追って学寮問題についての総長文書の形で出される予定である。

平澤 興 元総長の逝去

平澤 興 元総長は、6月17日午前4時急性心不全により本学医学部附属病院で逝去された。享年88。



先生は、本学の第16代総長である。先生は大正13年6月京都帝国大学医学部卒業後、同7月同助手、同14年10月同助教授、同15年5月新潟医科大学助教授、昭和5年5月同教授を経て、同21年7月京都帝国大学医学部教授に就任、解剖学第一講座を担当され、更に昭和24年7月から26年4月まで、吉田分校主事、同31年12月から32年12月まで医学部長、同32年12月から38年12月まで本学総長に任ぜられた。先生は、わが国における神経解剖学の草分けとして、その業績は広く世界に認められるところであるが、特に大脳皮質

錐体外路系の研究は昭和26年度の日本学士院賞の対象となった。

総長として前後6年2期に亘る在職中には、大学運営の最高責任者として、その円満な人格と卓抜した学識・見識により本学の研究・教育の水準を高めるために努力され、更に薬学部の設置、分校（教養部）の整備・統合、経済研究所、教養部、数理解析研究所、原子炉実験所の設置等本学の発展に貢献された。

更に総長退職後も京都市教育委員会委員、京都市立病院長、日本学士院会員、第19回日本医学会総会会頭、京都芸術短期大学学長等の要職に就くとともに、幅広い社会活動にも精力的に携わられた。

主たる著書に『脳と脊髄』、『皮質運動系』等がある。

昭和45年勲一等瑞宝章、同58年京都府文化賞特別功労賞を受けられた。

なお、告別式は、7月3日(月)本願寺会館（京都市下京区堀川通正面下ル）で執り行われる。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

<部局の動き>

創立40周年を迎えた 教育学部

教育学部は昭和24年5月31日、新制京都大学の発足と同時に、本学における第8番目の学部として創設され、本年創立40周年を迎えた。

これを記念して、教育学部では、平成元年6月3日(土)午後2時から、京都市東山区の都ホテ



ルに西島安則総長、前田敏男元総長をはじめ、来賓・招待者、同窓生約300名を迎えて、学部創立40周年を祝う式典と記念講演会、祝賀会を行った。

記念式典では、まず稲葉宏雄教育学部長の挨拶のち、西島安則総長が、本学教育学部の源流である京都帝国大学文科大学の「教育学教授法講座」の初代担当者であった谷本 富教授の業績にふれて祝辞を述べられた。次いで教育学部開設当時の文学部長であり教育学部長事務取扱であった宮崎市定名誉教授と初代教育学部長として学部の整備・発展に尽力された下程勇吉名誉教授の祝辞があり、最後に平澤 興、岡本道雄両元総長からの祝電が披露されて、式典は午後3時とどこおりなく終了した。

続いて午後3時より、本学部の河合隼雄教授が「個性について」と題して、臨床教育学的観点から記念講演を行った。

午後4時30分より行われた祝賀会には奥田 東、沢田敏男両元総長も出席された。祝賀会は岡 照雄文学部長、奥田、沢田両元総長による教育学部に対する暖い励ましの御祝辞と、鯉坂二夫名誉教授の乾杯の音頭で始まり、終始和やかな雰囲気のうちに行進し、午後6時30分、教育学部の更なる発展をねがって一同万歳三唱して盛会裡に終了した。

教育学部では同窓会の協力を得て、一昨年より「京都大学教育学部創立40周年記念事業会」を設立し、①学部創立40周年記念誌の発行、②同窓会寄附講義の創設、③内外の留学生の援助を通じた国際交流の推進を旨として来た。このうち、①については「京都大学教育学部四十年誌」として、500ページにわたる学部の回顧と反省を刊行することができた。

教育学部は現在、教育学科、教育心理学科、教育社会学科の3学科、15講座によって構成され、また、教育学研究科は教育学、教育方法学、臨床教育学（独立専攻）の3専攻から成っている。

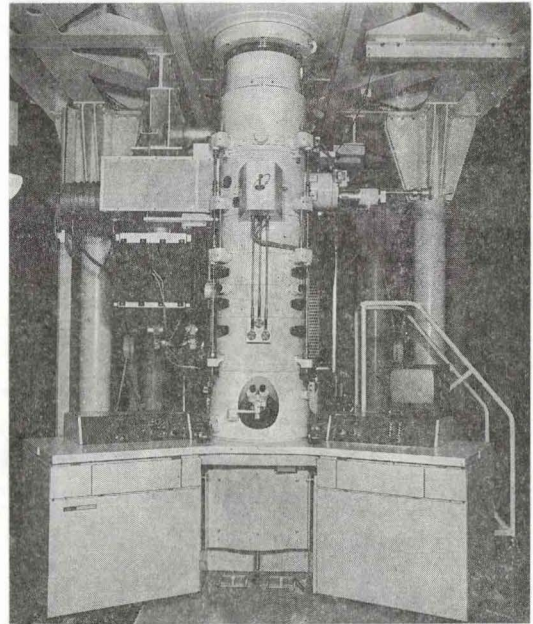
本学部は教育諸学の総合的研究と教育を行う学部としてわが国の教育界に貢献してきただけでなく、本学部の卒業生は教育以外の職業にも幅広く進出してめざましい活躍をしており、40周年を機に、更なる学部の飛躍と発展を期している次第である。
(教育学部)

化学研究所 電子線分光型超高分解能電子顕微鏡が完成

6月9日(金)、化学研究所 粉体化学研究部門 1,000キロボルト電子線分光型超高分解能電子顕微鏡の完成並びに同実験棟(本学宇治構内研究所本館西側、鉄筋コンクリート造、地上4階延905㎡)の竣工に伴う披露式が、西島安則総長をはじめ、学内外からの関係者約120名の出席を得て、宇治地区共通大会議室において挙行された。

披露式は、午前10時30分から始まり、高浪 満化学研究所長の式辞、西島安則総長の挨拶、大矢誠施設部長の工事経過報告があった後、川村恒明文部省学術国際局長からの祝電が披露された。

このあと、同電子顕微鏡並びに同実験棟が出席者に披露されたのに引き続き、宇治地区共通大会議室において祝賀会が催され、植田 夏名誉教授の挨拶、来賓の祝辞があり、堀尾正雄名誉教授(元化学研究所長)の発声で乾杯し、終始なごやかなうちに午後1時30分閉会した。(化学研究所)



故 江口 彌教授の工学部 化学工学教室追悼式

3月28日逝去された故江口^{わたる} 彌教授の追悼式が工学部化学工学教室主催により、5月20日(土)午後1時30分から3時まで、工学部大会議室において執り行われた。
(工学部)

〈 紹 介 〉

木材研究所・木質材料研究部門

—特性の活用と理想循環系確立のために—

木材の繊維細胞は、生来、結晶性をもつセルロース・ミクロフィブリルが異なる方向に幾重にも螺旋状に巻かれた繊細な円筒状積層構造（ヘリカル・ワインディング）をもっており、それらが一方方向に合理的に配列し、リグニンで強固に接着されているので、軟鋼、コンクリート、FRP（繊維強化プラスチック）など一般構造材料に比べると、無欠点の木材の繊維方向の強度は単位重量当りに換算すると抜群に高く、その熱伝導率は最も低く、比熱は最も高いなど多くの優れた特徴が見られる。その上に美しい外観と風合いをもつこの材料は居住空間を構成するのに最適の材料として認識が高まってきている。

木質材料学の領域では、この極めて繊細な構造に由来する木材の優れた特性を、利用に際して十分に発揮させるために、内在する節などの欠点を除去または分散させて再構成する方法が追究されているが、その過程において木材に生来欠けている新しい機能を付与し、理想的な材料に、より近づけることを1つの命題としている。

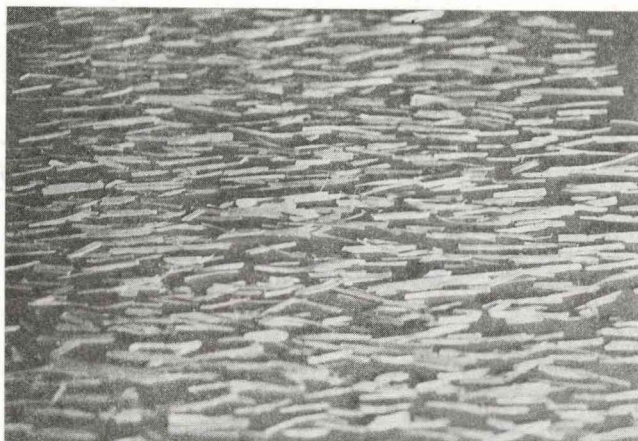
一方、木材は他の材料と異なり、生産過程で森林を形成し、大気を浄化し、国土を保全し、生態環境を向上させるなど公益的な役割りを果たしている。その利用分野は衣・食・住と文化の面にわたって拡がっており、廃棄に際しても公害がなく、分解物であるCO₂と水は森林で再び木材に合成される。木材はこのように優れた循環系をもった理想的な未来型の材料である。この意味において、われわれは木材の生産と利用の調和をはかり、理想的な木材資源の循環系を確立することが人類の未来にとって重要であると考えている。そのために、木材廃材等の有効利用の途を究めること、耐久性を向上させること、及び合理的な使用方法を明らかにすることなどが必要である。これらもまた、木質材料学の命題である。

本部門ではこれらの理念の下に、木質系新素材の開発、耐火性、耐朽性、耐候性、

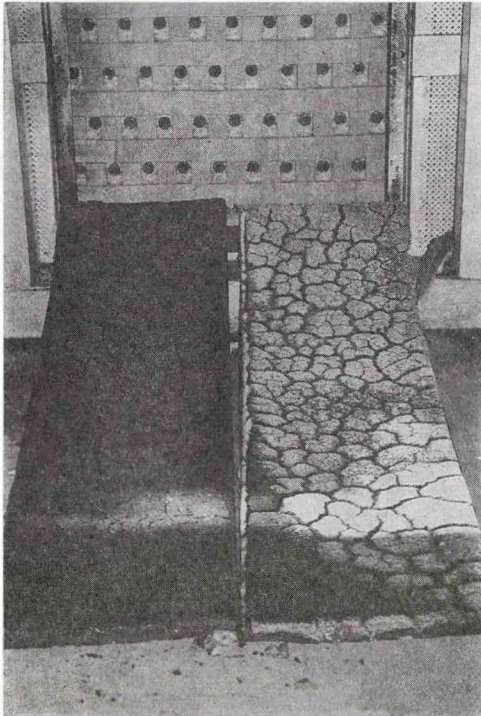
電磁波シールド性などの諸機能の付与、向上技術の開発、セメント、石膏、グラファイト、ガラス、金属など他材料との複合効果の探究、構造部材としての木質材料の性能と部材間の接合性能の解析、耐久性評価方法の開発などに関して、基礎研究から実大あるいは準工業生産規模の研究まで行っている。

旧火薬庫を改造した実験棟は天井が高く、大型実験設備の設置に好都合である。その中には生産規模の解織装置、削片機、実大構造部材の疲労試験用ダイナミックテスターなどの既製装置、機械類も散見されるが、実験設備の主体をなすものは高圧静電場を応用した配向性木質マット製造装置、連続式スチーム噴射プレス装置、高電圧式配向性ファイバーマット製造装置、載荷式耐火試験爐など独創的な設計による大型の実験装置群である。その多くは本部門の基礎的研究成果をもとに世界に先駆けて試作されたもので、特殊性と汎用性の両面を兼ね備えている。

本部門の最近の研究成果を概観すると：1) イソシアネート系接着剤の特性の研究とその応用による低比重木質ボードの開発（実用化済み）、2) 間伐材のLVL（単板積層材）化の研究とそのための外周駆動型ロータリーレースの開発（実用化済み）、3) 高圧静電場内で木材片に発生するトルクの研究とその応用による反転重畳式配向性マット製造システムの開発、4) スチーム噴射プレスにおける熱拡散のコンピューターシミュレーションとその応用による連続式蒸気噴射プレスの開発、



裏面から与えられた高圧静電場によって配向した木質パーティクル



30分耐火試験後の低比重ボードの表面
(左:防火処理ボード, 右:無処理ボード)

- 5) グラファイト・フェノール樹脂複合層を有する耐火性、電磁波シールド性木質ボードの開発、
6) 半剛接合を含む木質構造の力学的挙動の解析など。

このような内容に対して、海外の研究者の関心は高く、毎年2名程度の外国人研究者が数か月間滞在し、また、常時4名程度の留学生を受け入れており、国際色豊かな活気ある研究環境を作り出している。さらに、企業からも常時複数の受託研究員が研究に参加しており、内外の研究機関との共同研究も多い。また、本部門が中心になって、毎年「木質ボードシンポジウム」が開催されてお

り、内外から生産機械・プラントの開発情報交換、研究発表などが行われている。(木材研究所)

訃報

上野益三名誉教授

本学名誉教授上野益三先生は、6月17日逝去された。享年89。

先生は、大正15年京都帝国大学理学部選科を卒業後、引続き同学部研究嘱託、本学助手、講師、助教授を経て昭和28年教養部教授に就任、同38年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を授与された。この間、昭和18年5月から昭和24年9月まで理学部附属大津臨湖実験所長、昭和32年6月から昭和34年6月まで教養部評議員を歴任され大学の管理運営に貢献された。

本学退官後は、甲南女子大学の教授として教鞭をとられ、同大学名誉教授となられた。

先生の専門は陸水生物学、生物学史学であり、中でも淡水動物の分類学、及び日本博物学史の研究において数多くの優れた研究業績を残された。主な著書に『陸水生物学概論』、『日本博物学史』、『日本動物学史』等がある。

これら一連の研究活動、学術上の貢献によって1963年(昭和38年)アメリカ洞窟学会賞を受け、昭和46年には勲三等瑞宝章を授与された。

ここに謹んで哀悼の意を表します。(教養部)

学生将棋名人戦で優勝

平成元年6月8日(木)、9日(金)の両日に東京・千駄ヶ谷の将棋会館で行われた第45回学生将棋名人戦で、本学将棋部の菊田裕司君(経済学部1回生)が優勝した。

体育館附設プールの夏季利用

本学の学生及び教職員は、体育館附設プールを下記により利用できます。

なお、詳細については、学生部厚生課厚生掛(西部構内体育館内、電話 学内2590)に照会して下さい。

記

期間 7月11日(火)～8月31日(木) ただし、土曜日及び日曜日は使用できません。

時間 正午から午後2時まで

(注意) 1. 利用に際しては、必ず職員証または学生証を呈示して下さい。

2. 都合により使用をお断りする日があります。

(学生部)

白馬山の家の夏季開設

本学の学生及び教職員の厚生施設として、例年夏季及び冬季に開設されている白馬山の家を、今夏も下記により開設します。

この山の家は、中部山岳国立公園白馬山麓の柵池高原にあり、雄大な北アルプスの峰々に囲まれ、登山及び避暑などに最適です。

なお、建物は、山小屋風の木造地上2階地下1階建てで、間取りは、1階が食堂兼談話室、2階が寝室（ベッドで42名収容）、地階が浴室、乾燥室等からなっています。

記

1. 名 称 京都大学白馬山の家
2. 所 在 地 長野県北安曇郡^{あづみ おたり}小谷村大字^{ちくに}千国字柳久保乙869の2

(交通機関)

JR 大糸線「白馬大池駅」下車、松本電鉄バス「親の原」下車、徒歩約20分。

3. 開設期間 7月10日(月)～8月20日(日)
4. 所要経費 1人1泊使用料80円、ほかに食費実費程度。
5. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（西部構内総合体育館内、電話 学内2574）に照会してください。

(学生部)

白浜海の家の利用

本学の学生及び教職員の厚生施設として、白浜海の家を下記のとおり通年開設しています。

この海の家は、三段壁をはじめ千畳敷・円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、海に近く、夏は、海水浴に最適のところです。

また、海の家のある理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、500種以上の海の生物を集めた水族館があり、有料で公開されています。

記

1. 名 称 京都大学白浜海の家
2. 所 在 地 和歌山県西牟婁郡白浜町
京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内

(交通機関)

JR 紀勢本線「白浜駅」下車、明光バス「明光バス本社前」行に乘車、終点で「臨海」行バスに乗り換えて、「臨海」下車。

3. 開設期間 通年
4. 室 数 和室3室
5. 収容人員 35名
6. 所要経費 1人1泊使用料50円、ほかに食費実費程度
7. 申し込み及び利用に関する詳細は、体育会事務室（西部構内総合体育館内、電話 学内2574）に照会してください。

(学生部)

